なしこまどんのパトロール

鎌ケ谷市のある神社に狛犬がある。そんな狛犬にあいさつをしに来たものがいた。

ふわふわ空にうかぶ、かわいらしいシルエット。体に野菜や果物を巻き付けた生き物。

「ふー、いい汗かいたどん。おはこまどん！　なしこまどんが来たどん！」

いい朝どんね、とわっちは仲間の狛犬にあいさつをした。

身につけた物すべてがみずみずしく新鮮さを保った状態のわっちは今日も元気！

「最近、元気がない人たちを見ている気がするどん。わっちの気のせいと思いたいどんが、どう思うどん？」

仲間の狛犬もうーんと考え込んでいる様子。

わっちも腰に手をあててうーんと首をかしげていれば、さっそく今日最初の参拝者が来た。

おじいさんが願っていたのは、畑の管理をしてくれる人がどんどん少なくなっているというなやみ。

このおじいさんは他の神社にもまわって同じことを言っているらしい。神社の狛犬同士で毎日どういう相談を受けたか交信し合っている。そのなやみが最近多いと聞いた。

「うーん。どうしたら、みんな元気になれるどん？」

とりあえず松戸市、流山市の様子を見ようと空へ飛び立った。

松戸市の畑におりると、ちょうど小学生の子たちが体験で梨狩りをしていた。

「んん！　んんー！　き、切れない」

小さい子が思い切り背伸びをして、梨の収穫をがんばっている。

実っている位置が高いからハサミがうまく入らないみたい。

ふてくされて奥の方へ進もうとする子に「待って！」と声をかけるも届かないことに気づく。

やっぱり声が届かないのはいやだな……。おしゃべりしたい。
はっ、と首を振って考えをふき飛ばす。
わっちのことじゃなくてあの子のことを考えてあげなきゃ！
あの子のもとにうかんで行くと座り込んでつまらなそうに空を見上げていた。
まわりはなし狩りに夢中で楽しそうなのに、あの子だけ一緒の気持ちになれないのは違うような……。どうにかもう一度チャレンジしてくれないかな。
見えないはずなのにそわそわと空気だけがゆれ動いている気がする。
体を横にゆらしているうちにあの子は動き出してくやしい顔で梨に手を伸ばした。
かかとを上げて見上げている背中はまっすぐ一直線。負けない、あきらめない。
そんな背中だった。
わっちは手を伸ばしていた。さわることもできないのにどうしてもこの子を手伝いたい。
当たって、そう強く思ってさわり続けると枝が下がった。
切ろうとしている枝に男の子届く高さになった。
「あ！　切れそう！　もう、少し……。あ、切れた、やった！」
梨を高く持ち上げてうれしそうに飛び上がるその子の笑顔は、誰よりもまぶしかった。
周りにいた人たちもそんな声を聞いてにぎやかに盛り上げていく。
その子の梨を見て「大きいな、すげえじゃないか。なあ？」と笑う農家の人。
その声が耳に入った子が「どうやって取ったんだよ！　僕にも教えて！」と近づいている。
そんな会話から広がってどんどん伝線していく。
『できるよろこび』がこの子たちの背中を押している。
このまま、この子たちの未来に結び付くような思い出を作ってほしい。
思わず「ふふふっ」とこぼれた。
飛び上がって喜んでいた子が後ろを振り返って、わっちの方に目を向ける。
目があった、というおどろきに急いで梨の木の後ろに隠れてしまう。

ドキドキしてのぞくともうこっちを見ていなかった。
実体化していないのに……。うれしいが今日はたくさんできた。
「よーし！　この調子でどんどん見てまわるどーん！」
次は駅に向かった。
道の駅にある果物、野菜の近くに設置されているレシピが古ぼけている。
新しく作りやすいレシピを誰か考えてくれないかな。
すると、ランドセルを背負った小学生がわっちの前で止まる。
え……、もしかして見える子なの？
少しずつドキドキが早くなって、音がはっきりわかってくる。
そらせない。目がずっと合って、すり抜けそうと感じてしまう。
「ママー。この紙なーに？」
その言葉を聞いてやっと安心した。
肩に入った力が急に抜けたからか野菜の上に寝転んでしまう。
「それはね、料理のレシピよ」
「なんでこんなところに置いてるの？」
「いろんな人におすすめしたい野菜を使っておいしく食べてほしいからよ」
「でも、これって作るの大変そー」
ぎっちり字をつめこんだ紙はだれが見ても作るのには手間がかかりそうに見える。
「そうねー。簡単に出来たらママもうれしいわ」
「そっかー。ねえママ、私これ考えてみたい」
え！と声を喜びの声を上げる。
「ママとお料理したいってずっと思ってたの！　だからレシピから考えて一緒にお料理したい、だめ？」
ママさんはうーんと考えてにっこり笑った。
「いいよ、やってみようか！」

女の子はわーいと喜んで「発表の宿題が決まった！」とも喜んでいた。
出来上がりが楽しみだ！
「じゃあ、使うものを選ぼうか」
女の子は店の中をぐるー、と見て回っていく。
うんうんと頭をなやませてママさんの元に戻っていった。
「ねえ。ほうれん草は？」
「えー！　やだ！　おいしくない！」
「お姉ちゃんになるんでしょ？」
「食べれなくてもなれる！」
うーん、中々決まらない。女の子にほうれん草を食べさせようとママさんが色々言ってはみているけれど、食べる前から苦い顔をしている。
かなりきらいなんだろうな。
ママさんは女の子に「待ってて」と声をかけその場をはなれる。
女の子は床に置かれた買い物かごの横に座り込んでほっぺをふくらませていた。
「……お姉ちゃんになれるもん」
とうとう膝にほっぺをおしつけてボソッと言った。
……この子には、ほうれん草を好きになってほしいな。
お姉ちゃんになるとかならないとかじゃなくて、美味しいんだよって知ってほしい。
気持ちが込められた食べ物を味わってほしいな。
心からそう思った。
気持ちが前のめりになったせいか足に何かがひっかかり、つまづきかける。
パサっと女の子の横に落ちたのは透明（とうめい）なフィルムに包まれたほうれん草。
女の子はそれをじっと見つめた。
するとママさんが帰って来て「ちがう野菜をママと見ようか」と伝えると女の子は首をぶんぶんと横に首を振った。

「食べる！　食べるもん！」
立ち上がって、ほうれん草をぎゅっと抱きしめている。
「無理しなくていいんだよ？」
「無理じゃないもん！　赤ちゃんの前でいっぱい食べるもん！」
ふん、と鼻を鳴らすようにほうれん草をつかんではなさない様子にママさんは笑えてきたようだ。
わっちも急に食べると言い出した女の子の気持ちがわからない。
ママさんの大きなおなかを見て思うだけだろうか。
「あの子より食べれる！　ママ！　いっぱい作ろ！」
あの子？
遠くの方からかわいい歌が聞こえる。
少しずつその方向へ飛んでいくと『ほうれん草』というフレーズが何度も入った歌詞（かし）を女の子が歌っていた。
その女の子が持つ物をよく見れば、ほうれん草。
スキップをして店内を歩いている。
『ほうれん草大好き』と言っている様子を見てきっと私も食べれると思ったのだろう。
かなり負けず嫌いな子だ。
ある意味いい方向に進んでよかった、とほっとした。
このままおいしい料理のレシピを完成させてほしいな。
次は、もう少しにぎやかなところに行こう。
浮かんで着いたのは、イベント会場。
流山市で行われている農作物のおまつりで農業の人が育てた物を販売したり、楽器演奏をしたり、場内は盛り上がっていた。
香ばしい匂いにつられて向かえば鉄板の上でおどっている麺（めん）が見えた。
おいしそうな焼きそばによだれがたれそうだ。

ほうれん草も混ぜられていてますますおいしそう！

列に並ぶ人の横を通っていくと聞き覚えのある声がした。

梨狩りに参加していた男の子が小さなポーチを両手で持って、ワクワクしながら並んでいる。

何度も横から顔を出して列の順番を確認している。

子供らしいしぐさがほほえましかった。

もうすぐお姉ちゃんになる女の子とママさんもいた。

ほうれん草を前にして頑張って食べた後、ママさんのお腹をなでてほうれん草食べれるよ、と自慢（じまん）する声が聞こえた。

太鼓（たいこ）のステージが始まり、前の方へ向かえばお腹にひびく音が迫力満載（はくりょくまんさい）だった。

聞いている人たちも心から楽しそうだった。

そしてふと思ってしまった。

……もしかしたらわっちが何かする必要はないのかも。

みんながみんな思うように動いて楽しむことをしている。

はじめはやらなきゃ、と思った。

でも実体化がうまくできない今、わっちができるのはきっかけを目に入れてもらうこと。

それだけで、よりよく活気のある農業ができてる。

いつか実体化ができるようになったら、わっちも梨狩りや祭りに参加したいな。

そんな日を夢見て、今日も飛んでいこう。

明日はどんなできごとがまっているかな。